

分布：全国

スベリヒユ (スベリヒユ 科)

ポルチュラッカ オレラケア
学名: *Portulaca oleracea*

滑り莧 別名：ヒョウ、ヒョウナ、ウマビユ、アカジシヤ

主な生育場所

畦や空き地、庭先、道ばたなどで見られる。よく陽の当たる乾いた場所を好み、湿っぽい畦などには少ない。また、肥えた土壌でよく生育するが、極端な高窒素の環境下では生長が抑制されてしまう。

特徴

種子で繁殖する一年草。
全体が多肉質で、肉質の丸みを帯びた葉には光沢がある。茎は赤紫色を帯びて四方八方に枝分かれして地面を這う。7月頃から秋にかけて、各枝先に径1cm弱ほどの黄色い5弁花を1～5個着ける。果実はフタのあるカップ状で、熟すと帽子状のフタが外れ、残された皿に多数の黒い種子が乗る。



スベリヒユの花

名前の由来：昔から食用とされ、茹でて食べると野菜の「ヒユ」(アマランサスの仲間)に似ているが、ヒユよりも粘り気が強いことから、「ぬめりひゅ」。これが転じて「スベリヒユ」となったという。

<農業との関係>

乾燥耐性があるため、炎天下でもよく目立ち、抜いてもすぐ枯れにくく再活着しやすいことから、一般的には畑の強害草として知られている。しかし、密生することは少なく、また根系は浅く競合範囲も限られることから、作物との養分競合や水分競合に対しては、多分に過大評価である。他の雑草が枯れ込むほどの酷暑下でも生育できるたくましが害草としてのイメージを高めてしまっているのだろう。



マルチの隙間から生育するスベリヒユ

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ハナスベリヒユ(ポーチュラッカ)は、2～3cmほどの様々な色の花を咲かす多年草の園芸種である。また、葉が扁平な棒状となるマツバボタン(松葉牡丹)やヒメマツバボタン(姫松葉牡丹)もスベリヒユと同属の園芸種である。

<一言うちく>

スベリヒユは、気温が低下する夜間に気孔を開いて二酸化炭素を貯蔵しておき、昼間は気孔を開かず光合成する植物(CAM植物)なので、より気温の高く乾燥した場所にも適応できます。このため、他の植物が生育できない(=競争相手がいない)環境下に侵出できるのです。



乾燥した土壌でもよく生育する

<人との関わり合い>

山形県置賜地方では、「ひょう」「ひょうな」として、店先で販売されるなど「山菜」として扱われている。開花前に摘んでおひたしにしたり、みそ和えなどにするとねばりけがあって美味しい。また、乾燥して保存食とする。

生薬名「馬齒莧(ばしけん)」としても知られ、タンニン、ビタミンC、B1や多くのミネラルを含むので、乾燥したものを煎じて服用すれば、利尿、解毒などに効果がある。また、生の葉の絞り汁は、いぼ取り、虫さされ、湿疹によいとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

釣るされて一期しまひぬじ(すべり)莧

月落ちてこよひの名也馬莧艸(沾圃) ※馬莧艸=スベリヒユ

入間道の大家が原のいはむ蔓ひかばぬるぬる吾にな絶えそね(万葉集・作者未詳) ※いはむづら=スベリヒユ